

祇南海と李白

著者	松下 忠
著者別名	MATUSITA C.
雑誌名	漢文學會々報
巻	14
ページ	8-11
発行年	1953-06-25
URL	http://doi.org/10.15068/00146345

祇 南海と李白

松 下 忠

祇 南海の李白に対する態度、兩人の性格嗜好、詩風などより觀察する時、南海は日本近世詩壇に於ける李白に擬すべき唯一の詩人である。

一、李白に対する態度

李白と杜甫に対する南海の態度は、李白に対しては絶対的に之を敬慕し、杜甫に対しては批判的である。これは南海の性格や詩風の然らしめる結果に外ならぬ。李白と杜甫は唐代第一流の詩人で、二人の間には逡庭はつけ難いものとされている。南海はその詩論中に二人を屢々引例し稱揚しているとは云え、二人に対する態度には明確に相違がある。

例えば杜甫については、「杜子美・韓退之が如キハ材學本退（シ）キ故何ヲ作りテモ自然ニ強ミアリ」（詩学逢原卷下、）とか、「此老若キ比ハ朝罷香烟携滿袖、詩成珠玉在揮毫ナドト云ヒ、又碁局動隨幽澗竹、袈裟憶上泛湖船ナド云（ハ）ル事モ雅ニ句モ勝レテ雅ナリシガ……」（同上、）などと稱揚する点もあれば、「甚シクシテハ杜子美ガ詩ニ、一字ノ褒貶ヲ寓ス、コレヲ詩史ト云フベシト稱嘆シ、時事ヲ論ズル処忠義君ヲ忘レズト稱美スル類、以（テ）ノ外ナル僻事ト云フベシ。一字ノ褒貶ヲ寓シテ、世ノ警戒トスルコトハ春秋ノ教ニテ……是ヲ以（テ）詩聖トハ、大キナル心得チガヒ、笑ニ勝（ハ）ザルベシ」（詩学逢原、卷上、）と杜甫を以て詩聖とする通論に反対し、更に甚だしきは、白樂天や張籍の俗と並べて杜甫晩年の作品中には趣向上にも語

貴上にも卑俗な所があると指摘している。（詩学逢原、卷下、雅俗）而して彼の李・杜に対する態度の相異を最も明確に示した例を挙げると、

因論、觀_レ古詩、猶_レ齷處方_一。詩格卓者、須_レ觀_レ岑・李詩_一。語俗者、須_レ讀_レ李白・孟浩然_一。病_ニ於_レ寒瘦_一者、須_レ觀_レ王維・昌齡_一。病_ニ於_レ釘飯_一者、須_レ觀_レ高適・張謂_一。（湖雲讀詩上）

ここには詩格と用語の雅俗と詩の姿態と修辭について論じ、各項目に應じ理想とすべき唐の有名詩人七名を挙げているが、杜甫はこの中に含まれていない。かつ彼の詩論の中心をなすものの一つは雅俗の辨であるが、詩格や用語の卑俗を矯正するためには、岑參と李白、李白と孟浩然の詩を讀めと論じている。李白を二度も取上げているのに比べて、二人に対する南海の態度に大なる相違を見出さざるを得ない。

二、性格嗜好上よりの比較

南海は激昂不羈情熱の詩人で一生酒を愛した。松浦霞沿は南海と同年の故を以て木門の二妙と称せられた間柄であるが、南海に詩を贈つて曰く、

小少燕趙士。悲歌塞上雄。仗_レ劍酬_レ知己_一。氣激萬古風。讀_レ書自慙誦_レ章句_一。豈學_レ環堵_一老儒_一。朝來高_レ揖_二二千石_一。結_レ交高陽博酒徒。（鍾秀集、贈_レ祇伯玉_一）

と。李白は若い頃は劍を学び、任俠を以て自ら任じて諸国を歴遊し、玄宗に見出された後も平然と長安市上酒家に眠つたのであるが、南海が

劍に仗つて知己に酬いんとし、博酒徒と交を結んだというこの詩を詠むと、李白と全く軌を一にして思ふように思ふ。又曰く、春風能幾日。對酒但應歌。不令吾曹醉。其如花月何。(同上)と。李白が酒を愛し花月を愛した生活と全く等しい生活態度である。雨森芳洲は南海が十四歳木門に遊學以來の親友で、交友最も長く前後五十年に及んだ關係であつた。南海曰く、

今屈指已五十年矣。醉態吟容宛在。目矣。而不見諸君。無一人
在。獨芳洲雨先生松柏之姿。今猶蔚然。(湖雲談 語上)

而も「予於諸友、其所三敬畏、莫如伯陽氏。」(鍾秀集)と知己を以て許し、「贈對州雨森伯陽」の詩(南海先生集 卷一)を見ると、當時の詩壇が剽竊して自ら異とした時流を草芥視し得るもの、たゞ自分と伯陽氏あるのみとし、「我不得伯陽、肝膽向誰示」と云つたほど理解し合つた仲である。その芳洲が南海に詩を寄せて曰く、

吾黨祇夫子。高才本不羈。(停雲集云、激昂元不羈)

窮年唯有酒。開口便成詩。(鍾秀集、寄祇園盟 兄、節錄四句)

と。南海はたゞ酒を愛するのみならず、口を開けば便ち詩を成した。

岡島石梁も、親友の一人である。白石と共に南海の宅に泊つて詩を作つてゐるが、その中に、「由来慷慨去人遠。况復風流與世疏。」(鍾秀集、冬夜宿伯玉宅、和白石韻)の句がある。以上を以て南海の人となりを髣髴する事が出来る。

李白も亦豪放不羈の性格で終生酒を愛した情熱の詩人であつた事はその証拠を引くまでもなからう。

三、愛酒と作詩との關係

杜甫の「飲中八仙歌」に云う所の「李白一斗詩百篇」の句を味つて見ると、李白は酒が好きで詩が上手であつたと云うような、字面のみによる浅い解釈には賛成できない。李白の場合に好きな酒を呑めば呑むほどに、詩想煥發して詩篇湧くが如くに生れるという詩人であつた

と解釈したい。わが南海の場合も亦然りで、南海の嗜酒は単に酒を愛するばかりではなく、酒を呑めば呑むほどに才思沸き俊語疊出する風であつたのである。白石は停雲集に於て祇伯玉のこの点分に明かにしている。即ち南海は十七歳の時、元祿五年春分の日、其の詩才を試みて、午時より子初に至る間に五言律詩一百篇し、大いに時の称する所となつたが、一面これを疑う人も多かつた。そこで南海は同年秋分の日、再び百篇を賦せんとし、午漏初下より始めて夕刻までに五言律詩六十余篇を賦し得た。然し春分の日と同、題目を出されると、彼は語意の相似たものを避けようとして苦澁し酒を呼んでその力を借りたのであつた。白石の註に曰く、

天昏燭至。揖客而笑曰、今日諸君所命問、有與前作篇題同者、

鄙心竊恐語意相似。故苦澁至此、詩腸且枯矣。亟呼酒沃之、

夜未半、竟成百篇。才思若沸、俊語疊出、通計前後所作、

凡二百篇、無一句雷同者。衆皆嗟賞至明。(停雲集、祇伯玉案)

即ち酒を飲むことによつて、まさに枯れんとした詩腸は再び活きかえり、想も藻も沸くが如く疊出し、半夜に至らずして遂に百篇を成就した。而も前後二百篇一句も同じものがなかつたと云う。

四、作風より見ての比較

李白は天才の詩人、一氣呵成の風があつた。南海も亦天才の人、幼少より詩文に秀で、苦吟する作家ではなくて、一氣呵成の詩人であつた。二十五年間南海の門に学んだ田中駒嶽は、師の風貌を、「先生作為文章、口誦筆授、雖千萬言、未嘗立稿。」(南海先生集、田中駒嶽序)と書いてゐるが、南海は文筆の天才であつたよう、前述一夜百篇の作も之を証して余りがあると思ふ。

木下順庵の門下生は詩作に於て多士濟々、松浦渡沼は心ずしも第一等の詩人ではない。白石の停雲集にも僅かに四首を載せるにすぎない。然るに三十首収録された南海に対比して衆人推して「木門の二妙」と

なすのは如何なる理由であらうか。南海と同年であることの外に、詩作の態度に於て、苦吟する事なく数百言立ちどころに成るといふ作風が、互に似ている事によつて評されたものと考へる。白石はこの事を叙して「禎卿文學生知。不煩^三師訓、日弄^三翰墨、灑々数百千言、不^三甚怪^三思、而有^二作者之風^一。與^三祇南海^一同年生、衆推為^三二妙^一。」(停雲集、卷六、)と云つてゐる。鍾秀集に載つてゐる霞沼の詩にも兩者のこの作風を雄辯に物語るものがある。曰く、

我昔與^レ之情景最熱。氣投^レ綺叶緣自^レ天。詩酒追逐無^三虛日^一。臨風霞舉態仙仙。(次^三調伯玉詞^一兄弟、)

南海のこの作風は彼の詩論の上にも現れてゐる、曰く、

詩文要^レ、單刀直入^一、最忌^三綿密周緻^一。綿密則神爲^三迫拘^一、疎則天真爛漫。(湘雲談、)

と。單刀直入を愛し、綿密周緻を忌み、天真の流露を欲する点は、天馬空を行くが如しと評せられる李白の党で、推敲鍊磨の杜甫の流ではない。

五、神仙の風格より見ての比較

李白については、司馬子微の評として「仙風道骨あり」と謂い傳へられ、同じく賀知章はその詩文を始めて見るや嘆じて曰く、「予は謫仙人なり」(唐書、文苑、)と。後世の人も詩仙を以て李白に許してゐるが眞に飄々然として世を遺れた風がある。

さて前述霞沼の詩に、「臨^レ風霞舉態仙仙。」と見えてゐるが、私も南海を以て日本近世詩壇隨一の詩仙であると考へる。彼には自ら仙を慕う氣持が十分にあつて、彼の詩を讀むとその字句が散見してゐる。

「哭^三白石^一詩」に云う。

他日青城山下遇。看君早已騎^レ羊仙。

と。白石の六十歳の誕辰を賀する詩の一節に云う。

白石先生天上仙。身騎^三麒麟^一下^三九天^一。

三十六帝留^レ不得。天風吹^レ衣颯翩翩。
夕憩^三扶桑^一倚^三東壁^一。夜煉^三白石^一餐^三紫烟^一。
往々吐出天上語。人間聽者耳茫然。

(南海先生集、卷一、新井使君、六十華誕、恭製^二律^一)
以具^三祝壽^一、且跋^三此篇^一奉贈併述^三鄙衷^一、

この二つは白石を詠じた詩句ではあるが、彼の述懐に外ならないと思ふ。この点について霞沼は、南海が仙を慕つた事を明瞭に肯定して曰く、「祇子工^レ文兼好^レ仙。憶與^レ余訂探^三大藥^一。」(鍾秀集、次^三韻伯玉詞^一、)南海が神仙を慕う氣持は、和韓唱和の晴れの場所に於ても表明されてゐる。正徳元年来朝の韓使中第一の文學者たる李東郭に贈つた詩の中に、「帶礪千年鄒好厚。文章一代使臣雄。由來學士登瀛客。先見仙才御^三大風^一。」(寶館總評集上、敬呈^三東郭李^一と云う句がある。而して李東郭の日本の詩人に対する唱酬は數十人に及んでゐる中で、南海に對してのみ、「敬次^三南海詩仙^一韻^二とて^一詩仙」の語を許してゐる。南海の風格に又詩風に定めし神仙の風があつたに違いない。

六、結 び

南海の詩篇中には、李白の詩を想起させるのが数多くある中で、七言絶句の一篇と古詩の一篇を挙げて、類似点を指摘しよう。

剪除白髮三千丈。何處窮愁著^三箇長^一。
萬古蒼然洪水竹。清濯更^又耐^三風霜^一。(南海先生集、)

この詩は李白の「秋浦歌」に次韻したものと謂うべきで、詩想も語句も李白に借り、韻字さえ全く同じように作つたもので、李白に対する私淑の程が偲ばれる。しかし次に引例する古詩は南海独自のものでありながら、自然兒の風貌といふ、一氣呵成の調子といふ、高踏遺世の思想といふ、全く李白に類似するものと謂うべきである。

金龍臺^(停雲集、)
忽傾三百杯。直上金龍臺。不^レ窮^三千里目^一。何消^三萬古哀^一。

下視^二天下士^一。賢愚渾塵埃。名利良微物。鐘鼎非^二吾才^一。
匹夫抱^レ璧良其罪。禍福徇^レ人因^二自媒^一。
朝敢^二封侯一夕爲^二魚肉^一。躡^レ珠之客爲^レ誰來。
牢耶石耶何曩々。土山漸臺作^二死灰^一。
況復我生非^二松喬^一。白日西飛難^二再回^一。
百年開^レ口一大笑。身後鴻名何在哉。

黃帝について

今井宇三郎

當^レ歌意氣乍奔逸。傍人莫^レ怪玉山頽。
唯願手弄^二風間月^一。萬古千秋照^二金懸^一。
起句は李白の七古「山中與^二幽人^一對酌」の詩句「一杯一杯復一杯
想わせ、結尾は「把^レ酒間^レ月」の詩句「唯願當^レ歌對^レ酒時、月
照金樽裏。」と變るところがない。
以上によつて私が祇 南海を日本近世詩壇の李白とすること
ては概ね異論はなからうと思ふ。 以上

(一)

昨年、学会總會の席上、黃帝の性格について論述した際、上帝—皇帝—黃帝の演變説を採り、溯源して黃帝の性格を上帝的なもの、即ち天の思想と結論した。その後、更に資料や論文を調査した結果、その結論が少しく抽象化に過ぎたことを認め、ここに黃帝について再論する次第である。

ただ黃帝のごとき、民間信仰と深く結びついた古傳説の解明には、民族学や考古学の成果が多分の貢獻をなすべきであるが、それらの諸点については、御示教を仰ぐこととし、ここには、専ら文献に見える黃帝について、その發生の機相を大略考察したいと思ふ。

(二)

黃帝の地位は、史記の五帝本紀に至つて、初めて完着したと言へる。何となれば、そこに於て、歴史的古帝王としての地位を獲得し得たからである。史記本紀に記載される以前と以後との文献では、黃帝

に對する取扱ひ方に於て著しい相違が容易に発見される。百子全書に見える数多くの黃帝記事によつて見れば(注一)、それ以後の文献では、すべてなんらかの意味に於て黃帝本紀の記事を踏襲してゐる。しかしそれ以後の文献では、その記事が著しく神話的・傳説的であり、従つてその地位も浮動してゐる。まさに、「百家、黃帝を言ふ、その言、雅馴ならず。」と、史公に評される通りである。今その種々相について、ここに縷説する余裕をもたないが、ただ史公によつて、かくのごとき不動の地位を定めしめるに至つた原因や理由については、種々の考察が可能である。その重要な契機をなしたのものとして、父談の學風、並びに漢初黃老思想の盛行が挙げられる。司馬氏父子の學風相違論(注二)は別としても、漢初に於ける黃老思想の盛行については何人といへども異論の余地はないであらう。この黃老思想の盛行に關聯して、その濫觴の問題が諸家によつて論及されてゐるが、それは当然、黃帝思想の發生にまで溯源せざるを得ない問題となつてゐる。すでに清儒陳澧の指摘のごとく(注三)、漢初に始まるものでは